

(2. 特集 行く・読む・感じる)

2-3. ナイロビの路上、表現の場

三阪 夕芽子

ケニアでの約1年のフィールド調査を終え、懐かしさとともに恋しさをおぼえるものは、ナイロビ市民の足、マタトゥ（matatu）だ。日本ではほとんど知られていないだろうが、「動く美術館（museum on wheels）」と称されるほどユニークな姿かたちをし、ナイロビの人びとの日常生活やアイデンティティに密接しているものである。本稿では、ナイロビにおけるマタトゥとその労働者の状況を、フィールドワークを振り返りつつ紹介してみたい。

マタトゥは、端的に言えば公共交通機関、あるいは乗合バスである。ケニア全土を網羅する交通手段として、庶民の足となっている。特に首都ナイロビにおけるマタトゥは、都市周辺部に居住する多数の低所得者層にとって、仕事の集中する市中心部へ通勤するための唯一の公共機関であるため、日常生活には欠かせない移動手段である。近年、中間層が増加しているケニアでは自家用車を所有する人が増加しているものの、今なおマタトゥは多くの人びとを乗せてナイロビじゅうを駆け回っている。



写真1 ナイロビ中心部のマタトゥ乗り場
(2016年8月筆者撮影)



写真2 派手なボディ
(2016年8月筆者撮影)

マタトゥは、車体のオーナーや乗務員のお気に入りの音楽や、こだわりの外内装で派手に彩られており、彼らの表現の場となっている。車体のデザインは、ケニアの若者が熱中しているもの—例えば、アメリカで人気のあるヒップホップ・アーティスト（クリス・ブラウン、ニッキー・ミナージュなど）や、ジャマイカで人気のあるレゲエ、ダンスホール・アーティスト（ボブ・マーリー、ヴァイブス・カーテルなど）のイラスト、プレミア・リーグ（アーセナル、マンUなど）や高級ブランド（ルイ・ヴィトン、シャネルなど）のロゴが人気である。

さらに、マタトゥの車体デザインとして人気なのは、キリスト教に関するものである。それは、イエス・キリストやマリアの肖像、アメリカで人気のある牧師やゴスペル歌手（カーク・

フランクリン、メアリー・メアリーなど)、ケニアのゴスペル歌手（ウィリー・ポール、バハティなど）の写真、聖書の一節、キリスト教に基づく訓戒などが挙げられる。ボディのいたるところには「メシア」、「救世主イエス・キリスト」、「キリストは王」、「神はわれらとともに」、「神は我が指導者なり」などの文言が描かれていたり、Wi-Fi を搭載している車体では、アクセスポイントのユーザー名やパスワードが「ヨシュア」、「インマヌエル」、「アルファ」、「オメガ」など、聖書における重要な人物名やフレーズであったりする。キリスト教徒が国民の約8割を占めるケニアでは、多くの国民に親しみのある表現であるといえる。（ちなみにイスラム教徒の多いケニアの海岸地方では、「アッラーを讃えよう」といったイスラム教的な文言が描かれたマタトゥがみられる！）



写真3 Jesus とも Christ ともよめるグラフィティ
(2016年8月筆者撮影)



写真4 マリア像が描かれたマタトゥ
(2016年8月筆者撮影)

マタトゥは、運転手、および乗客を呼び込み、運賃を回収するコンダクターと呼ばれる乗務員によって運行される。写真3や写真4のように、多くのマタトゥのボディには、キリスト教的世界観や聖書的な表現が描かれているが、マタトゥの労働者はケニアにおいて、「キリスト教的教えから最もかけ離れた」人びとと認識されていることが少なくない。運転手やコンダクターは、「チーム・マフィシ」（マフィシ [Mafisi] はスワヒリ語でハイエナの意味。「人の女」を横取りするような、女遊びの激しい人たちを指す）と呼ばれ、タバコ・大麻・薬物・アルコール中毒者も多いため、キリスト教的な道德観に反しているとみなされているのである。また、早朝から深夜までナイロビじゅうを走り続けるマタトゥは、その走行の乱暴さと無礼さで悪名高い。運転手は法外のスピードを出し、強引な割り込みで車間をすり抜け、逆走し、歩道や中央分離帯に乗り上げ、客の乗降のために道路の中央で急停車・急発進する。コンダクターによるしつこい客引き、定員超過、釣り銭の横領なども頻繁に起こる。

しかし、常に急ぎ立てられたように走る運転手やコンダクターの生活と将来は、日々の水揚げにかかっているという厳しい現実もある。また、マタトゥの運営にかかる人件費や燃料費、車体の保険料やローンの回収のために、運転手やコンダクターに課せられた売上げノルマも非常に多い。さらに、粗暴な運転の取り締まりに目をつぶってもらうため、警察への賄賂も必要となる。そのため、一日じゅう休むことなく走り回り、うんざりするような交通渋滞のストレ

スに耐え、少しでも多くの稼ぎを得ることに躍起になる。また路上では、売り上げや乗客を狙った強盗やテロリストの脅威にもさらされている。マタトゥ労働者は、社会的にも経済的にも周縁化された状況で、綱渡りの狂弄を繰り返しているのである。

最後に、マタトゥ労働者はこのような不安定で切迫した状況を、車体（ボディ）や車内のデコレーションによって表現している側面があるのではないか、という視点から考えてみたい。キリスト教的表現を用いた例を挙げてみよう。何度か路上で見かけたことのある、マタトゥのボディに描かれた「安息日を守りなさい（Keep the Sabbath）」という文言がある。聖書のコンテキストが分かれば、十戒の第四戒を念頭においているのだろうということが分かる。ただ、少しでも多くの客を乗せ、売り上げを確保しなければならないマタトゥ労働者にとって、「安息日」を守ることはまず不可能である。実際に、この文言を掲げたマタトゥは、本来の安息日とされる土曜日はもちろん、日曜日にも走っている。むしろ日曜日は、教会に通うクリスチャンを乗せる格好の機会である。単純に、キリスト教徒である乗客に親しみやすいメッセージとして描かれているかもしれないし、神の定めた「安息日」にさえ、その日暮らしをしている自分たちは守ることができないのだという皮肉がこめられた表現かもしれない、とも考えてみるのできるのである。

これはほんの一例にすぎないが、マタトゥには様々なフレーズや諺が散りばめられている。マタトゥ労働者が生き抜く場である仕事場としての空間では、このようなキリスト教的文言や表現は、周縁化された彼らにとって自身を正当化するひとつの手段となっているのではないだろうか。それは、自身の不遇をかこったり、それをユーモアや皮肉に変えてみたりする「遊び」のようなものであり、同時にナイロビの路上で繰り返されるアートのようにもみることができるのである。